

69
80

M

知夫
沿
革
誌
全

知夫村沿革誌

緒言

知夫村沿革誌編輯ノ創意ハ實ニ明治二十四年ニ在リ願フニ本
 村古來ノ沿革ヲ書類ノ徵スルモノ甚タ少キヲ以テ幾多ノ歲月
 ヲ積ニ諸種ノ方面ヨリ材料ヲ集輯シ不屈不撓以テ筆ヲ下スノ
 後ニ非レハ成テ能ハサルノ業タリ而シテ予ノ不敏敢テ當ラヌ
 ト雖モ今ニシテ之レカ編輯ニ從事セズンハ後來夫レ何ニ因テ
 カ事實ノ精確ヲ得ンヤ依テ常務ノ餘暇ヲ得先ツ筆ヲ天佐志比
 古命ノ由來ニ起シ以來本村生活ノ有様ヨリ人智進否ノ度合ヲ

集録シ明治二十九年ニ至リ筆ヲ停ムルモノ積テ一小冊子ヲ爲
 スヤ友人ノ之ヲ印刷ニ付シ頒タシコトヲ請フニヨリ書目ヲ名
 ケテ知夫村沿革誌ト曰フ其編纂ノ主旨ハ載セテ凡例ニ在リ但
 後來ノ事實ニ於ケルヤ其精詳ヲ欠クモノ多シ請フ大方ノ君子



幸ニ補剛セラレシムトナ

明治廿九年十一月廿日

編者識

知夫村沿革誌

凡例

- 一此書ハ古來ノ事蹟ヲ集纂シ以テ后世ニ傳ヘ人智ノ進否ヲ對比スルノ便ニ供スルヲ旨トス
- 一此書ハ舊家ノ反古紙社寺ノ捺札過去帳及口碑實跡等ニヨリ編纂シタルモノナレハ其及ハサル所並ニ誤謬等ハ他日ノ増補訂正ニ讓ル
- 一考證ヲ明徴センカ爲メ引用書及ヒ出所ヲ()内ニ記ス
- 一口碑ニ傳フルモノハ口碑ト書シ異説アルモノハ割註シテ參考ニ供ス
- 一編次ノ體裁ハ部目ヲ設ケテ列記ス

目次

管轄沿革	位置及地勢	部落	名所	舊跡
民情	居住	衣類其他	飲食物	風俗
宗教	孝子	功蹟	軍人	獻金
日本赤十字社員	教育	社寺	農事	漁業
工業	病災	火災	飢饉	地震
内亂	風害	貯蓄	交通	地産
會社	爭論	地圖		物産

知夫村沿革誌

渡邊周太郎編輯
 渡邊佐一校正
 石塚勝太郎



往古ノ事實ハ知ルニ由ナシト雖モ隱岐國御支配ノ起リハ人皇
 十六代ノ帝 德天皇ノ御宇武内忠義公御入國夫ヨリ御支配續
 テ四百五十二年 天平元年ニ至ル
 神護二年ヨリ隱岐治郎右衛門殿御入國夫ヨリ御支配續テ百三
 十三年治部少輔殿御時代延喜四戊年ニ至ル
 延喜五年己二月ヨリ佐々木隱岐守御入國夫ヨリ御支配續テ四
 百三十五年佐々木隱岐判官御時代正慶二年ニ至ル
 建武元年尼子民武少輔殿御入國夫ヨリ御支配續テ二百三十六

年尼子正ノ五郎殿御時代天正十一年未七月十五日ニ至ル
天正十一年八月三日ヨリ安藝ノ廣島内取吉川駿河守殿御内藤
宗次郎殿御入國夫ヨリ御支配續テ十六年慶長三年ニ至ル
慶長四年亥冬ヨリ堀尾帶刀雲州へ御入國夫ヨリ御支配續テ三
十五年寛永十年ニ至ル池田出雲守殿小出大和守殿古田兵部少
輔殿エ御預ケトナル
寛永十一年ヨリ京極若狹守殿雲州エ御入國夫ヨリ御支配ニナ
ルコト四年全十四年ニ至ル古田兵部少輔殿龜井能登守殿小出
大和守殿エ御預ケトナル
寛永十五年寅二月ヨリ松平出羽守様御預リニ被成御請取ニ宮
崎源太左衛門殿山瀬九郎右衛門殿御渡海被成若狹守殿御内坂
井庄右衛門殿ヨリ御請取御支配續テ五十年ナリ
元祿元年辰ノ夏ヨリ御代官由比長兵衛殿御預リトナリ松平出

羽守様御内大塚吉兵衛殿中西文右衛門殿間宮喜右衛門殿ヨリ
御請取被成御代官御支配續テ三十二年ナリ
享保五年子八月ヨリ松平出羽守様御預リニ被成石州御代官武
田喜左衛門殿御内西村武助殿佐野武太夫殿松浦豐太夫殿ヨリ
全廿三日ニ出羽守様御目附松平源太夫殿御郡代村尾皆右衛門
殿御代官豐島與左衛門殿和多田四郎太夫殿御請取ナサレタリ
以上(舊家ノ古書ニヨル)
徳川氏幕府ノ時出雲石見ニ諫スルモノ各前後廻回ナリ
王政復古即チ明治元年鳥取藩ニ管セシメ尋テ隱岐縣ヲ置キ既
ニシテ廢シ大森縣ニ併セ更ニ島根縣ニ合シ復タ鳥取縣ニ諫シ
後改メテ島根縣ヨリ統治セリ
徳川氏幕府ノ時ヨリ明治廿九年ニ至ル村長ヲ掲載スレハ概テ
左ノ如シ

一 庄屋ノ部

延寶九年	渡邊 利兵衛	延寶九年	渡邊 彌左衛門
元祿五年	渡邊 助右工門	元祿九年	和田 九右工門
元祿九年	村尾 安右工門	寶永三年	彌右工門
享保三年	徳右工門	享保三年	幸七
享保十一年	九藏	享保十六年	助四郎
元文元年	九七郎	延享三年	助右衛門
延享三年	彌右工門	寶曆十一年	三郎左衛門
寶曆十一年	彌左工門	明和元年	辨之進
寛政年間	金右工門	寛政年間	幸七
文化年間	助四郎	天保年間	渡邊 岩次郎
天保年間	渡邊 幸七	文久年間	原 儀三郎

一 明治紀元村長渡部祐七

一 戸長之部

明治七年六月廿五日	渡邊 祐七	明治十三年六月五日	渡邊 重三郎
明治十七年八月十七日	宇野 幸彦	明治十九年十二月廿日	岩佐 久一郎
明治廿二年三月廿二日	角 脇 繁美	明治廿二年七月五日	竹中 寅次郎
明治廿五年十月十二日	平塚 庫敬	明治廿八年三月廿日	森 脇 平作
明治廿九年八月十九日	岩佐 久一郎		

位置及地勢

知夫村ハ隱岐國ノ南端西徑六度四十八分一秒北緯三十五度五十九分三十秒ニ在リテ東北ハ海士郡崎村布施村ニ枕ニ西北ハ知夫郡浦郷村ニ對シ南ハ出雲國ニ面シ西ハ大洋ニ沿フ其周圍六里三十一町十九間東西一里十五町南北廿五町其形恰モ瓢ノ如シ明治十二年六月九日戸長役場ヲ郡里ニ置キ之レヲ管轄ス地勢ハ山又山ニシテ平野ハ至テ少ナシ沿海ハ數十ノ島岐及暗

礁アリ

一土地反別及貢租左ノ如シ

調査年號	種別	田	畑	宅地	雑地	合計	納租
文化八年	石高	二九、三六〇合	七五、七六〇合			八七、一三〇合	六、九三〇合
明治廿九年	反別	二〇、五〇八歩	八、三三三、九〇四歩	一六、〇一八歩	一、四一九、五〇六歩	二、四、〇〇三歩	
全	地價	二、五三六、〇〇二厘	八、四九七、一〇八厘	一、一八四、三三七厘	三三七、六六三厘	二、四、五三三、一〇三厘	
全	地租	六三、四三三厘	二二、六六四厘	二九、六三三厘	八、二二〇厘	三三三、九一八厘	三三三、九一三厘

部落

一知夫村ハ往古ヨリ村名改稱或ハ分合等ヲナセシコトナクシ

テ左ノ八里ヨリ成立ス尤モ文字ニ至リテハ手振、千振、知夫里、等
ヲ用井タルコトアリ

明治十五年一月調各里戸數人口表

戸數人口	里名		薄毛	多澤	郡	來居	大江	仁夫	古海	合計
	男	女								
戸數	二二	五二	六六	一九	四二	九三	七八	三七二		
人口	男 四七 女 五三	男 一五二 女 一二五	男 一六四 女 一八四	男 三七 女 三六	男 一一〇 女 八六	男 二二三 女 二二三	男 一六〇 女 一七〇	男 八九二 女 八六七		

明治廿八年調年別戸數人口表

戸數	人口	年別				
		慶長十八年	文化八年	天保九年	明治十四年	明治廿八年
戸數	六四	一三三	一五〇	三七一	四四八	
人口	四四八	八五一	一、二五七	一、七五九	二、三一一	

名所

一風景頗フル優秀ナルハ左ノ四ヶ所トス

一渡津連島ノ風景 東北ハ天然ノ風致好良ニシテ諸島草木繁茂シ畫工ノ好材料タリ

一淺島ノ春景 本島ハ一面芝草ヲ布キ春色明美風景最モ絶佳ナリ又海邊ニハ魚介群集ヲ爲シ以テ一層ノ風致ヲ佐ク
一辨天島俵島ノ夕涼 本島ノ付近ニ船ヲ深ヘ此島岐ヲ臨メハ岩石風雅ヲ競ヒ數十年ヲ經タル松樹アリ又海上コハ數百ノ漁火無限ノ快樂ヲ添ヒタリ辨天島ニハ辨財天ノ祠アリ下ニ一窟アリ方二間東西南北ニ四通ス東西ハ窓ノ如ク小ニシテ南北ハ入口ノ如ク大ナリ夏日暑ヲ茲ニ避クルモノ蓋シ數年ノ壽ヲ延フルノ感アリ俵島ノ頂上ニハ御影石ニ 大乘妙典一字一石弘化三丙午年建設ノ石碑アリ
一赤ハケ山ノ眺望 本山昔ハ檜樹森々タリシト云フモ今ハ

一樹モナク只芝草ノ萋々タルヲ見ルノミニシテ知夫村第一ノ高山ナリ頂上ニ陸軍陸地測量部一等三角點ノ建設アリ内地付近及隱岐國全体殆ント一目ノ下ニ望觀スルコトヲ得ルハ本山ノ長所タリ

舊跡

一知夫村舊跡多シト雖モ章ニ上リシモノ殆ント稀ナリ今口碑ニ殘リシ所ト散在セル書類トヲ取捨折中シ左ニ其概要ヲ掲載ス

一神島 人皇三十一代用明天皇ノ御宇ヨリ白雉四年マテ天佐志比古神鎮座アリシヲ以テ今尙ホ此島ヲ神島ト云ヒ付屬島嶼ニ鳥居島アリ

一赤ハケ山(昔赤山)ニ古海防仁夫里防アリ元弘ノ頃 後醍醐天皇當國へ御潛幸在セラレ給ヘシ當時仮行在所トナリシト云

フ(散在セル古)元龜ノ頃赤ハゲ山ハ一面檜樹森々トシテ白晝
尚ホ暗夜ノ威アリ然ルニ或時檜樹共擦ノ爲メ火災起リ全山
而防一朝ノ烟トナリ今其跡ヲ留ムルモノ防跡ノ口碑ニ殘レ
ルト其石築アルノミ

一天佐志比古命ノ社殿前ニ立石アリ是レハ後醍醐天皇御
潛幸ノ當時本社へ御巡幸遊ハセラレ此石ニ御腰ヲ掛ケサセ
ラレ御休憩ナシ給ヒシト云フ是ヲ以テ今尚ホ此石ヲ崇敬ス

(口碑)

毎年九月中ノ午ノ日ニハ中午祭ト稱ヘテ當年ノ新穀ヲ供シ
テ祭典ス且右腰掛石ニモ全様祭典シ以テ崇敬セリ

一古城山古海ヨリ東方ニ拾町去テ古城山アリ何某ノ住メル
ヤラン知ル人ナシ(不在城年號古書ニナキヲ以テ)
一字文學ニ文覺上人ノ墓地アリ(即チ遠藤盛遠)

一字芝山ニ出雲國日御崎小野檢校氏ノ墓地アリ其略歴概テ
左ノ如シ

日御崎大明神ニ事ヘ奉ル天ノ穗日ノ命八十一代ノ孫小野檢
校尊成ノ妻花子ノ色香ニ横戀慕ヲナシタルハ松江ノ城守綱
親君ニテアリケリ如何ニカシテ夫檢校ヲ遠ケント無實ノ難
ヲ申掛ケ知夫村ニ配所ノ月ヲ見ルニ至ラシメタリ昔ニ變ル
愛身ノ上察スヘキナリ日御崎ノ生神様ト傳ヘ聞キタル其人カ
如何ナル罪アリテカ此流罪ト聞キシヨリ正直ナル島人トモ
何レモ氣毒カリテ諸用ヲ便シ中ニモ次郎太、權左、源作ナント
云ヘル漁師トモ誠心正意ヲ以テ朝夕訪問シテ其心ヲ慰メ
リ然ルニ小野檢校ハ城主綱親君ノ非道ナル處置ヲ怨ミ恨ミ
ノ餘リ全家ニ傳ハル十二支神秘ノ術ヲ以テ七代ノ崇チナサ
ント海水ニ沐浴シ身ヲ清メ屏風ノ岩上ニ至リ九座ノ惡神三

十六位ノ天剛魔神七十二個ノ地煞妖精子カ怨敵ヲ退治シ給ヘ
ト一念疑テ祈ル事稍久クシテ后自ラ舌ヲ嚙切リテ終ニ鬼籍ニ
入レリト斯クテ后松江ノ城内ニハ怨靈ノ崇アリ茲ニ於テ城
主モ前非ヲ悔ヒ群臣ト協議ノ上城ノ南ナル松ノ一群茂レル
丘ニ宮殿ヲ造營セラレ神號(小野檢校及全人妻花子)ヲ推惠大明神ト贈テ
レテ御靈ヲ慰メタレハ神モ受納マシマシケン其後ハ何事モナカ
リシト云フ(散在セル書類ト口碑ニヨル)

民情

一村民ハ古來教育ノ何タルヲ辨スルモノ至テ少ナシ故ヲ以テ
人智ノ發達遲々トシテ振ハサルハ實ニ痛歎ノ至リナリシ然ル
ニ今ヤ明治天皇陛下ノ御思澤ハ終ニ全國ニ普及シ本村ノ如キ
僻邑ニスラ尙ホ直接ト間接トヲ問ハス教育ノ普及ヲ企圖セラ
レシヲ以テ人民舊來ノ陋習ヲ破ルノ氣運ニ向ヘリ而シテ其之

ニ與カリテ大ニ力アルモノハ明治廿四年十二月當時ノ島司赤
間赴城君村内人民ヲ一場ニ集メ國民ノ三大義務及勤儉貯蓄其
他諸般ニ就キ數万言ヲ費シ懇ロニ訓諭セラレシヲ以テ大ニ民
心ヲ開發セリ其要項左ノ如シ

納稅義務 兵役ノ義務 教育ノ義務 勤儉貯蓄
勸業ノ發達 衛生ノ心得

以上ノ如クニシテ民心開發ノ時期ヲ得タリト雖モ之レカ實行
上ニ就キ適當ナル先導者ヲ得サルカ爲ニ折角ノ訓諭モ殆ント無
効ニ屬スルノ感ナキ能ハサリシ然ルニ明治廿八年三月森脇平
作君(石見國那賀郡)本村戸長ニ任命セラル、ヤ直チニ各里ヲ巡回
シ村民ヲ一場ニ集メ島司ノ訓諭ヲ再演スルコト以上二回此日
數八日ノ長キニ及ヒ熱心ヲ以テ躬ヲ先導者ノ勞ヲ取ラレシ結
果大ニ事情ヲ昔日ト異ニセリ是レ實ニ君ノ賜ニシテ本村改革

ノ元祖ト稱譽スヘキノ人ナリ

居住

一知夫村居住ノ有様ヲ視ルニ敏達天皇御宇以前ハ穴居シタルモノニシテ其内身分アルモノノミ茅舎ヲ建設シアリシカ其後月ヲ重キ年ヲ經ルニ從ヒ茅舎ニ住ムモノ漸次其數ヲ増セシカ全ク穴居ヲ脱セシハ文祿ノ頃ニアリ此頃ノ茅舎ハ木竹ヲ以テ壹間半或ハ二間位ノ堀建ニシテ三尺間ノ入口ヲ設ケ之レニ柴戸ヲ以テ鎖シ内部床ナクシテ土上ニ枯草ヲ布キ此上ニ起臥飲食シ以テ居宅ト定ム然リ而シテ人智漸ク其度ヲ高メ屋内床上ノ必要ヲ認メタリシモ之レヲ設クニ竹簧ヲ以テシ此上ニ蓆ヲ敷キテ住居スルノミ夫ヨリ進ンテ床敷ノ竹簧蓆ヲ板敷莖ト改メ堀立屋舎ヲ組立建造ニ改良セシハ近ク享和年間ノ頃ニアリキ而シテ家屋ノ構造ヲ一層改良シテ出入口疊建具ヲ設ケ且ツ

屋根ヲ瓦葺ト改造セシ第一番ハ鹿島久右衛門ノ長屋第二番ハ弘化三年野村彦四郎ノ居宅即チ今ノ知夫村戸長役場ニシテ現今ハ凡ソ六分通以上瓦葺ヲ以テ充タサレタリ(口碑及古老ノ言)

衣類其他

一衣類往古ノコトハ知ルヲ得スト雖ヒ慶長十八年檢地アリテヨリ以后百姓以上ノ身分ニ至リテハ麻上下ニ紋付衣ノ禮服ヲ着用スルコトヲ得レト聞脇小間者ニ至リテハ公民權ナキノ制ニシテ一切禮服ハ許サレサリキ而シテ平素ノ服裝ニ至リテハ其粗末ナリシコト目今ノ通常人士ニハ視ルニ忍ビサル程ノ有様ナリシ然ルニ明治四年平民ニ袴高袴割羽織ヲ許サレシ以來現今ハ社會ノ風潮ニ引連シ昔日ト大ニ其趣キヲ異ニシ下等貧民ト雖ヒ尙ホ且ツ絹糸入ノ晴衣等ヲ所持スルモノアルニ至レリ蒲團ハ文化年間ヨリ蚊帳ハ天保年間ヨリ始リシカ現今ハ一般

ニ普及セリ又昔雨天ニハ菅又ハ藁ヲ以テ蓑ヲ編ミ筍皮ヲ以テ笠ヲ造リ之レヲ着用シ又足駄ハ山桐ヲ以テ造リ之レニ筍皮ヲ以テ緒トナシ使用セシカ今ハ毛布羅紗帽ヲ着用シ獸皮ノ靴又桐臺木履ニ獸皮ヲ以テ緒トナシ鼻掛ヲ用ヒ表付ノ下駄或ハ白黒ノ足袋首卷胴卷腰卷ヲ用ユルモノ間々アルニ至レリ
傘ハ文政十二年頃ヨリ使用セシカ明治十五六年頃ヨリ洋傘ヲ使用スルヲ以テ傘ハ其數以前ヨリ減少セリ

飲食物

一 往古生計ノ度合最モ低クシテ日常ノ飲食物ノ大体ヲ摘記セ
ハ即チ平素ノ食物ハ大麥稗菜等ノ雜飯ヲ使用シ米ノ如キニ至
リテハ正月盂蘭盆會節句其他重病者アル場合ノ外ハ一切使用
セザリキ然ルニ近來甘藷ヲ耕作シ大ニ常食ヲ補足スルニ至レ
リ而シテ現今食物モ度ヲ高メ米麥甘藷等ヲ用ヒ酒ハ日本酒ヲ

嗜好セリ

一 肉食ハ古來魚肉ニ限ルモノ、如クナリシカ現今ハ鳥獸ノ肉
ヲ食フモノ其數ヲ増シタリ(獸肉ハ明治十八年頃ヨリ食用ヲナシタリ)

風俗

一般村民ノ容姿ハ一種異様ノ風彩アリ頭髮男ハ第一亂髮第二
半髮第三總髮第四半髮第五斬髮女ハ總髮ニシテ昔ヨリ結束シ
來リタリ部内斬髮ノ卒先者ハ明治七年渡部祐七君ニシテ明治
廿五六年ニ至リ始ント全數ニ及ヒタリ
部内人民ハ舊習ヲ重ノスルノ心ニ富ミタルカ又ハ大勢ヲ看破
スルノ明ナキカ陰曆廢止以來始ント三十年ノ星霜ヲ經過スル
モ未ダ陽曆ヲ全然實行スルニ至ラサルハ痛歎ノ外ナシ
言語及禮義等ニ至リテハ習ヲ習傳シタルニトナキヲ以テ其誤
謬アルハ自然ノ數ナリ今其一二ヲ記シテ他ハ讀者ノ判斷ニ任

ス一寸知已ト言語ヲ交ユルニモ殺スト云ヒ糞喰ヒト云ヒ途中
ニテ人ニ禮儀ヲナス場合ニモ手拭ヲ被フリ手ヲ懐ニシナカラ
今日ハト云フテ過キザルハ始ントナキナリ又他家へ至リタル
場合ニモ首卷ノ儘ニテ起キサシタカト云ヒ休マシヤイト云ヒ
或ハ無斷退出スルモアリ
古ヨリ男十五歳以上二十六歳マテノ間ハ若者ト云フテ一ノ團
体ヲナシ大ニ權威ヲ振ヒ理ヲ非トナシ非ヲ理トナスモ彼等ノ權
内ニアリテ局外者毫モ犯スコト出來サリシハ彼等ヲシテ暴行
ヲ極メシメ社會ニ害毒ヲ流布セシメタル一大原因ナリ之ノ實
ニ千歳ノ遺感トスル所タリ今俄ニ之レカ矯正策ヲ講究スルモ
數百年ノ慣習ヲ一時ニ除去スルハ是レ又容易ノ業ニアラスト
雖トモ現今社會ノ進歩ハ蒸氣ニ電信ニ飛翼ヲ添ヘタル如ク駭
々乎トシテ止マサル智識ノ戰場ニ生レタルモノ豈斯ル痴愚ノ

舉動ニ貴重ノ光陰ヲ空費スルノ否ナルヲ悟ラサルモノアラソ
ヤソレカアラソカ早クモ大江里郡里ニ於テハ茲ニ視ル所アリ
テカ夫々矯正ノ策ヲ講シ且ツ又學校職員ハ卒業生ヲ以テ組織
シタル同窓會ヲ設ケ智識ノ發達ヲ計畫シツ、アリ

宗教

宗教ハ淨土二百五十戸眞宗五十戸日蓮宗四十六戸ニシテ明治
廿九年八月初メテ耶穌キリスト教傳道師來着セシモ耳朶ヲ傾
ケルモノナシ

孝子

孝子徳行者トシテ公認セラレシ者ハ奥川徳八中西由太郎小濱
樽若ノ三氏ナリ

効績者

明治廿八年教育上見ルヘキ廉アルノ故ヲ以テ島根縣知事ヨリ

功績狀ヲ受ク知夫村郡尋常小學校訓導渡邊佐一
明治廿八年勲儉貯蓄上見ルヘキ廉アルノ故ヲ以テ島根縣隱岐
島司ヨリ功績狀ヲ受ク知夫村儲蓄會長渡部周太郎

從軍者

明治十年西南役ニ從軍シ戰功金貳拾圓ヲ、ヲ受ケシ者ハ陸軍
歩兵谷万二郎全松原春松全敷周次郎全高崎乙若ノ四氏ナリ
明治廿七八年戰役ニ從軍シ戰功勳章及一時賜金ヲ受ケタルモ
ノ左ノ如シ

戰功年金廿四圓下賜白色桐葉章勳八等海軍壹等機關兵野村
才太郎

戰功金五拾圓下賜瑞寶章勳八等海軍二等機關兵上西權太郎
戰功金三拾五圓下賜瑞寶章勳八等陸軍步兵二等卒上仲安太
郎

陸軍后備役一等兵山口春松全松浦林吉海軍后備役四等水兵
崎重太郎陸軍現役二等兵新澤乙次郎全一等兵濱田兼太郎全
輻重輪卒鹿島才次郎ノ六氏ハ戰功金貳拾五圓宛ヲ拜受セリ

献金

明治廿七八年日清戰役ノ際軍資金ノ内ヘ左ノ通り献金セリ

渡邊周太郎渡邊佐一平塚庫敬ノ三氏ハ金壹圓宛石塚勝太郎
渡部剛渡邊貞次郎鹿島常次郎ノ四氏ハ組合ニテ金壹圓ヲ献
金セリ

日本赤十字社員

正社員安藤慶太郎安藤安太郎小前由三郎嘉見權太郎渡部佐一
渡邊祐七吉岡政一渡邊周太郎新澤新八長谷川松太郎仲濱樽吉
田畑清七岩佐久一郎石塚勝太郎ノ十四氏ナリ
賛助社員渡邊喜太郎新谷万三郎永廣貞三郎佐藤加治馬ノ四氏

ナリ

教育

兒童教育ノ重ナル點ヲ摘載スレハ即チ昔時ノ教育ハ寺子屋ト云フテ兒童(男子ニ限ル)九歳ノ頃ヨリ寺院ノ住僧又ハ醫師等ヲ頼ミ手習修學セシムルモ其數曉天ノ星ノ如シ然リ而シテ其教授ノ方法ニ至リテハ視ルヘキモノアルナシ今當時授業ノ順序ヲ略記セハ第一平仮名いろは第二數字第三里名付第四村名附第五國盡第六名頭第七手習教訓書第八今川第九庭訓往來第十實語教第十一童子教第十二四書第十五五經等ノ如クニシテ習字又ハ素讀ニ止メ講義ニハ重キヲ置カサルナリ

明治七年二月創メテ小學校開設トナリ稍々舊來ノ方法ニ改良ヲ加ヘシト雖モ教育ノ方針確定セサルヲ以テ或時ハ高尚ニ過キ或時ハ洋風ニ流ル、等ニシテ國民教育ノ本旨ニ伴ハサルア

リ然ル處明治廿三年十月三十日教育勅語喚發セラレシ以來始メテ教育ノ方針定マリシト雖モ本村ノ教育事業ハ遅々トシテ振ハス其成績左ノ如シ(明治廿四年三月十日知夫小學校へ勅語謄本及文部大臣訓諭下賜)

學齡兒童	男		女		學齡兒童百ニ對スル就學ノ歩合
	別	全	別	全	
兒童	男	女	男	女	
學齡兒童	男	女	男	女	
就學兒童	男	女	男	女	
不就學兒童	男	女	男	女	
學齡兒童百ニ對スル就學ノ歩合					
兒童	男	女	男	女	
學齡兒童	男	女	男	女	
就學兒童	男	女	男	女	
不就學兒童	男	女	男	女	
學齡兒童百ニ對スル就學ノ歩合					

明治廿八年后俄ニ就學及出席歩合ノ増加セシハ當時管理者タル戸長森脇平作君部内人民ニ訓示スルニ勅語ノ旨ヲ以テシテ訓導渡邊佐一君之レヲ翼賛シ其他職員同心協力以テ茲ノ盛況

ナ呈シタリ

校舎ハ明治七年廢寺庄樂寺本堂ヲ以テ之レニ充テ明治十八年
現在庄樂寺住僧宮谷智禪字河井千五十番地へ校舎ヲ建築シ元
庄樂寺本堂即チ知夫小學校ト交換セリ降テ明治廿六年十二月
八日今ノ校舎ヲ新築シタリ明治廿七年二月十二日 御眞影ヲ
奉迎ス

明治七年十二月以后古海、仁夫、多澤ノ各里ニ校舎アリテ或ハ支
校トナリ分校トナリ又分教場トナリ其興廢屢ナリシカ現今獨
立ノ一校トナリシハ只古海尋常小學校ノミ仁夫、多澤ノ兩校ハ
郡尋常小學校ニ合併セリ古海尋常小學校ハ古海里元阿彌陀堂
ヲ以テ充用セシ處明治廿二年十二月十四日夜同里火災ノ爲メ
類焼シ明治廿四年新築セリ其間姬宮神社拜殿又ハ辻堂ヲ以テ
仮校舎トナシ僅カニ授業ヲナセシコト一ケ年有余ニ及ヒタリ

學校役場職員ハ時々人民ヲ集メ教育談ヲナシ以テ教育思想ヲ
喚起セリ

部内ニ購讀スル新聞雜誌ハ東京日々新聞大坂朝日新聞山陰新
聞松江日報教育會雜誌國學院雜誌大陽醫事月報國況等ナリ
明治十五年調二十歳以上ノ者文字ヲ知ル者男七十六人女
五人文字ヲ知ラサル者男五百三十人女五百六十五人ナリ

社寺

天佐志比古命 人皇三十一代用明天皇ノ時新府利南海中ノ島
嶼ニ御鎮座在ス一五十九年時ニ孝德帝ノ白雉四年癸丑八月十
五日午刻ニ新府利東濱詰ニ御移遷シ給ヘタリト(天佐志比古命神
社系圖ニ見ユ)
延喜式所載天佐志比古神ハ此御神ノコトナリ

天長十五年奉授隱岐國天佐自比古神從五位下(續日本后記所載)
延喜ノ頃天佐志比古神國幣小社タリシニ其後兵亂ニ遇ヒ祠廟

表廢明治五年村社ニ列セラル祭日七月十五日九月十五日ナリ
シモ后改メテ六月十五日八月十五日トセシ處明治廿七年再ヒ
七月十五日九月十五日ニ復舊セリ
社殿往古ノコトハ知ルノ証跡ナシ貞應二年癸未年改建築万治二
年享和二年天保二年再建立其間葺替等ハ屢ナリキ明治廿九年
六月改築屋根ヲ銅板葺トナシタリ(棟札ニヨル)
天王原神社祭神ハ素盞鳴命ニシテ其勸請年月日不詳延寶八年
十二月七日社殿造立其后享保十六年七月明和元年十二月文化
六年八月文政六年八月文久二年六月明治廿二年ノ數度改造且
屋根替等ハ屢々ナリキ明治廿九年維持金募集規則ヲ制定シ數
十年ノ后之カ充實ヲ圖レリ
渡津神社 祭神五十猛命ナリ或ハ云フ本社祭神ハ渡津姬命ニシテ五十猛命ハ現在浦郷村鎮座郷社由良姬命神社ノ祭神ナリト
勸請年月日不詳明和三年社殿修復享和十六年九月寛政二年二

月ノ兩度修繕嘉永元年六月修繕屋根桐板葺トナシタリ
寶物ハ銘加賀田河内守正安丸形經八寸量目二百匁ノ神鏡在リ
多澤神社 祭神ハ伊弉册命ニシテ勸請年月日不詳享保三年十
月十日社殿築造享保十一年寶曆十二年天明八年十一月安政二
年三月二日天保十三年十一月明治七年十月改建立此間葺替等
屢ナリキ明治廿九年十一月銅板葺ニ改造セリ
大山神社 祭神大山祇命或ハ云フ本社ノ祭神ハ大己貴命ナリ大山祇命ハ美田村ノ大山神社ノ祭神ナリト
勸請年月日不詳延寶九年七月十一日社殿建造元祿九年寶曆十
三年十一月嘉永七年十一月明治廿三年改造セリ其間葺替等屢
ナリキ
姫宮神社 祭神日本姫神姫宮神社ノ祭神ハ古來ヨリ二説アリ一委媛命ニシテ一漏ノ廉ナキカヲ保スヘカラス即チ本社祭神ノ如キモ其一説ヲ取レリ然レモ熱々案スルニ其祭神ハ後説ノ如クナラント思惟ス何ントナレハ今モ猶産婦ノ守神トシテ乳房ノ形ナトテ供實アレハナリ
古勸請年月日不詳寛永元年社殿造營享保九年九月元文

元年十二月十三日明治廿五年改遷其間葺替等屢ナリキ
愛宕神社 祭神軻遇突智命勸請年月日不詳元祿十年十二月五
日社殿建遺寶曆寅年七月廿五日寛政六年十月一日明治七年六
月社殿改遷其間葺替等屢ナリキ

以上ノ如クニシテ伊勢太神宮辨財天ハ廢社トナリ天佐志比古
命天王原神社多澤神社宇菅神社大山神社姫宮神社ハ村社ニ渡
津神社愛宕神社ハ攝社ニ列セラル明治五年十月官達

莊樂寺 本尊阿彌陀如來正保元甲申年開基法譽的傳創立ノ寺
ニシテ享和三亥年五代目厚譽觀嚴寺院再建立明治元年隱岐國
内亂ノ爲メ明治三年八月廢寺トナル明治十年説教所ヲ設ケ明
治廿一年九月三日廢寺再興ノ官許ヲ得明治廿九年十一月本堂
ノ葺替ヲナシタリ

莊樂寺永續金千四拾八圓正米五石三斗本山ハ西京東山智恩院

ニシテ住僧ハ宮谷智禪ナリ
願成寺松養寺連光寺ハ明治三年八月廢寺トナリタル儘再興セ
ス

農事

往昔農事ノ不振ナルコト實ニ豫想ノ外ニ出ツ第一昔時ハ人口
戸數共ニ少ナシ隨テ好田畑澤山アリシモ之レカ糊口ヲ凌ク能
ハス其依テ起ル原因ヲ尋ヌルニ第一種子ハ最劣等食用ニ堪ヘ
サルモノヲ撰ヒ第二耕耘除草ヲ等閑ニ付スルコト第三施肥ノ
効能ヲ熟知セサルコト第四甘藷ノ耕作ヲナサ、リシコト第五
牧場ノ取締方全キヲ得サリシコト等ニシテ以テ農業ニ從事ス
ルニ依リ其結果殆ント視ルヘキモノアルナシ村民ハ毎年春季
ニ於テ糊口上願フル困難ヲ極メシテ以テ野菜草木ハ當時村民
ノ常食トシ見ルモ敢テ過大ノ言ニアラサリキ蓋シ常因常歎ハ

以テ勸業ノ智識ニ乏シキヲ証スルニ足レリ
村民常食ノ殆ント三分ノ一ヲ占ムルモノハ甘藷ナリ甘藷ノ耕
作ヲ村内ニ始メシハ文化三年ノ頃古海里松本廣三郎ナル者石
見國ヨリ種ヲ取寄セ栽培セシカ今ハ一般ノ食用トシ大ニ嗜好
スル所トナリタリ
現今農事上ニ就テハ大ニ昔日ト趣キテ異ニシ事々物々試験ヲ
行ヒ好成績ノアルモノヲ獎勵セントシ以テ農事試験場ヲ擴張
スルノ氣運ニ向ヘリ夫レニ引連シ一般農民ニ至リテモ農業思
想稍々進歩シ今日實行スル處ノ耕作方法以前ト全ク反對スル
ヲ視ルニ至レリ即チ第一種苗精選スルコト第二耕耘除草ヲ勉
ムルコト第三施肥ノ效能ヲ研究スルコト第四甘藷ノ耕作ヲ擴
張セシコト第五牧場取締ノ法ヲ得タルコト等ニシテ耕作ノ進
歩ヲ見ルニ至リタルヲ以テ年々春季困難ノ淵ニ沈ムコト稀ナ

リ然リト雖モ人口ハ年々歳々増殖シ土地ハ依然タリ斯ノ如ク
ニシテ數十百年ヲ經過スルニ於テハ到底産費相支フル能ハス
シテ終ニ自滅スルノ外ナシ茲ニ於テカ村民ハ大ニ陸産ノ改良
増殖ヲ企圖セサルヘカラサルノ運ニ至リ農談會ヲ設ケ農業ノ
經驗智識ヲ交換シ牧場取締ノ方法ヲ設ケ畜來ノ弊害ヲ改良シ
又村農會ヲ設ケ農業ノ弊害ヲ矯正シ農事試験場ヲ設ケテ農作
ノ試験ヲナス等是レ昨今ノ有様ナリ
養蠶業ハ漸ク明治廿二年頃ヨリ本業ノ將來見込アルト唱ヒ着
手シタル者アリシカ今ハ漸ク其緒ニ着キ年一年ト増殖スルニ
至レリ
牧畜ハ牛馬ニシテ明治十七八年ノ頃ヨリ種畜ノ改良ヲナシタ
ルモ未々其体格ニ至リテハ好成績ヲ視ルヲ得ス依テ明治廿九
年八月知夫村種牛供用組合ナルモノヲ組織シ出雲國八川村ニ

種牛ヲ購求シ牧畜ノ改良ヲ圖ラントスルアリ
牧場ノ有様ヲ回顧スレハ明治十七年以前牧場ト耕作畑ノ間垣
ハ戸々別々ノ長大ナル結立ヲ爲スヲ以テ完全ニ牛馬侵入ヲ防
クニ足ルヘキモノ殆ント稀ナリ故ニ數十日汗ノ油ヲ流シ作
上タル穀物野菜モ一朝牛馬ノ侵入ノ爲メ荒野ト化スルコト屢
々アリテ安全ニ收穫スルコトヲ得ス加之海濱人家ノ邊ニハ常
ニ牛馬ノ群集徘徊スル處トナリ其不潔ト不取締ナルコト名狀
スヘカラス茲ニ於テカ當時ノ戸長宇野幸彦君(知夫郡美)ハ之レ
カ改良ニ着手シ第一戸々別々長大不完全ナル垣ヲサシヨリハ
村民一致協同シ以テ牧垣ノ負擔ヲ輕クシ堅固ナル方法ヲ設ク
ルノ急務ナルヲ示スト雖モ數十年ヨリ持續シ來リタル舊習
如何ソソ俄カニ改良說ニ贊成スルモノアラソヤ然リト雖モ君
ハ倦マス撓マス懇諭セラレシ結果漸クニシテ其第一着先鞭ヲ

加ヘタルハ大江郡多澤來居ノ四里ナリ爾來願ニ此牛馬侵入ノ
大被害ヲ除キ耕作物ノ收穫ヲ安全ナラシムルヲ得タリ依テ以
テ明治廿四年二月廿一日知夫村農談會ヲ開キ其決議ニヨリ全
村舉テ茲方法ヲ實行スルコト、シタリ其効驗著大ナルコト如
斯當初之レカ實施ノ際ハ實ニ苦情一方ナラサリシ人民モ今ハ
其方法ニヨリ農作物ヲ安穩ニ收穫スルノ功績忘レシト欲シテ
忘ル能ハサル顯著ノモノナリトシ明治廿六年十二月卅一日第
五回知夫村農談會ニ於テ左ノ如キ感謝狀ヲ送リタリ

感謝狀

明治十七年以前本村農事ノ狀景如何ト回顧スレハ牧場不取
締ノ爲メ牛馬侵入ノ一大被害ヲ受ケ之レカ善后ノ策ヲ講究
スルハ當時ノ急務ナルモ其卒先者ナキヲ如何セシ是レ實ニ
本村ノ不幸ニシテ又以テ遺憾トスル所ナリキ然ルニ閣下職

ナ本村戸長ニ受ケ吾々農民ノ先導者トナリ牧場取締ノ方法
ヲ設ケ此大患被害ヲ一除セラレシハ之レ編ニ閣下ノ賜ニシ
テ村内農民ノ肝膽ニ銘シテ賞道スル一大功點タリ故ニ吾々
農民ヲ代表スル者其功蹟ヲ追想シ威喜ノ至リニ堪ヘス聊カ
一言ヲ陳シテ以テ拜謝スルコト如斯

明治二十六年十二月三十一日

知夫村農談會出席會員連名

舊知夫村戸長宇野幸彦殿

現今ノ農具ヲ列舉スレハ即チ、クヲ 鋤 鍬 鎌 肥桶 肥手桶
笑 溜桶 肥柄杓 千齒 耜白 馬鍬 等ナリ
肥料ノ種類ハ即チ 人糞 厩肥 海藻 草木灰 魚類洗水
魚腸 鹽汁等ナリ

漁業

古來漁業ノ何タルヲ辨セサルコト久シ漸ク人智ノ度合進ムニ

從ヒ製品及漁具ノ改良ニ至リタルハ即チ昨今ノコトナリ
錫ハ隱岐國特有ノ物産ナリ今ヨリ六七十年前ニ於テハ製造
ノ方法ヲ了知セサルニヨリ從テ其價格及販路ノ如キモ低廉且
狹隘ナリキ其后稍々人智ノ開クルニ從ヒ舊來壹束幾何ト價格
ヲ定メシモ明治十年頃ヨリ百匁ニ付何程ト價格ノ標準ニ異動
ヲ來タシタル爲メニ乾燥ノ法充分ナラス製品ノ腐敗トナリ次
第ニ聲價ヲ減退セシメ又如何ントモ矯正ノ途ナキ迄ニ至ラシ
メヨリ茲ニ於テカ明治二十年官廳ヨリ本業ノ前途ヲ患ヒ之レ
カ改良ノ方法ヲ命達セラル然ルニ漁民ハ前途ノ憂恐ヲ悟ラス
只一時ノ僥倖ヲ得ント謀リ大ニ本法ヲ訛難スルモノアリシト
雖是等ノ愚民ニ顧着セス其歩ヲ進メ水産物製造全業組合ナ
ルモノヲ組織シ製品ノ改良ヲ爲スヲ得テ大ニ製價ヲ回復シ今
ハ海外ニ信用セラル、ニ至リタリ且ツ又進メテ漁業組合ナル

モノヲ設ケ漁業上ノ弊害ヲ矯正スルコトヲ勉メツ、アリシカ
 今ハ隱岐水産組合トナリタリ
 鮑ハ本村海岸ニ播殖スルコト非常ノ多數ナリ明治十三年御手
 洗時太郎ナル者採鮑ノ爲メ潜水器械數臺ヲ使用シ採取シタル
 ナ以テ其種屬殆ント盡クルマテニ至ラシメタリ是レ部内漁民
 ノ常ニ注意セサルヘカヲササル事柄ナリ
 藻葉採取及ヒ輸出セシ紀元ハ文政三年伯耆國波ノ善助ト云フ
 モノニシテ目下ノ輸出格ハ平年拾五万貫匁ニシテ自家用ノモ
 ノト合スレハ凡貳拾貳万貫匁トナリ
 海産收穫ノ重ナル物ノ名稱ヲ舉クレハ先ツ鰯鯖鱈鰯鯛鮑海
 鼠海苔藻葉和布荒布石花菜等ナリ
 漁具及製造具ヲ列記スレハ 卷繩 撻繩 四ツ張網 地引網
 瀬引網 釣 タラシ カガラ オンガラ カガリタ フタマタ

ナツバイ 柄鎌 子ヲ イカグシ スヲ ハテ 衝 烏賊柵
 器等ナリ

漁業上慣行特約ハ左ノ如シ

漁業上ノ慣行トハ從來ノ慣行ニヨルコトナリ即チ漁場ニア
 リ漁場ハ釣漁撻繩(撻繩ヲ除ク)刺網ハ入合トシ採介採藻海
 鼠採鯖網大敷網曳網ハ各村區域ニ從ヒ犯ス可クナルナリ
 撻繩ハ之迄度々紛議アリ明治八年十二月左ノ如キ特約ヲ
 ナシタリ

阿島漁業ニ付 濶 界海之儀ニ付御届

一當國ノ漁民從前ヨリハ濶濶ト唱ヒ分界ヲ立テ業ヲ營
 居候處今般全國一般ノ御趣意ニ付舊弊ヲ捨分界ノ無差別漁
 業可營答ニ御座候得共數百艘ノ漁船故海界相立不申候テハ
 既ニ爭論可發ハ勿論互ニ漁業ノ便利ヲ缺キ不都合不少依テ

兩島漁場戸長惣代示談ノ上別紙圖ノ通界海極候然上ハ漁民
共界海ノ義嚴重ニ相守リ向後爭論ケ間舖義仕間敷爲其定書
取替シ候ニ付此段御届申上候也

明治八年十二月

漁村戸長及漁民總代連名

(別紙圖第二號)要領左ノ如シ

北方ハ海士郡海士村フタマタヨリ穩地郡那久岬マテ西方ハ
海士郡崎村松屋ヨリ知夫郡知夫村沖大クリ瀬見通ノ外ナ差
繩漁場トシ其以内ヲ漕繩漁場ト定メタリ

明治廿六年知夫海士郡漁業組合ニ於テ明治八年十二月ノ特
約ヲ左ノ如ク變更シタリ

北方ハ從前ノ儘西方ハ海士郡崎村松屋ヨリ大クリ瀬見
通トシ是ヨリ以西ハ漕繩ハイ繩入合漁場トシ以東ハ漕繩漁
場ト爲シタリ

工業

工業ニ至リテハ視ルヘキ程ノモノナクシテ只僱カニ木工アル
ノミ文化元年頃ヨリ始マレリ器械的工業ハ絶テナシ且ツ又職
工モ記載スル程ノコトナシ享和年中ヨリ布ヲ織リ始メテ今
日ニ至リテハ絹糸入ノ織物ヲナスモノアルト雖ヒ矢張習得シ
タルモノニアラサルヲ以テ時勢ニ伴ハサルノ感アリ

病災

病災往古ノコトハ之レヲ知ルノ記録ナシ近世ノコトニテ知リ
得ル事跡ハ即チ文久二年癩疹及天然痘明治五年天然痘何レモ
傳染シ大ニ生命ヲ損シ且又明治廿七年八月四日ヨリ全十一月
七日ニ至ル間赤痢病大ニ傳染シ百十五名ノ患者ト二十八名ノ
死亡者ヲ出シ避病院ヲ宇ハサリ石字散田ノ二ヶ所ニ設ケ醫師
及吏員定詰ヲナシ以テ救濟事務ニ従事シタリ

明治十八年癩疹傳染シ其外諸流行病屢ナリト雖ニ著大ノモノ
ニアラサルヲ以テ之レヲ略ス

火災

元龜年間字赤ハゲ山失火全山ノ檜樹燒失セリ其原因ハ檜樹共
擦ナリト云フ(口碑)

天明八年古海里ニ失火アリ全里燒土トナリ人畜モ又被害アリ
シト其原因ハ今ノ横山政七先代ノ臺所ナリト(石塚氏ノ古
文書ニ見ユ)

明治十年十一月十三日夜仁夫里佐藤加治馬納屋ヨリ失火類燒
三戸ナリ其原因古海里宮本武八長女ナマ其納屋ヲ借受居住ノ
際失火

明治十二年五月十六日午前十一時郡里浪花周次郎牛納屋ヨリ
失火類燒本家納屋ヲ合セテ十二戸ナリ其原因浪花爲次郎(年
七歲)摺
附木ヲ弄ヒ葎敷壁ニ移リタルニヨル

明治七年十二月廿五日午前九時來居里前良三郎方ヨリ失火類
燒壹戸其原因物置長屋ヨリ失火シタルニ其火元不詳

明治廿二年十二月十四日夜古海里松浦益太郎方ヨリ失火類燒
本戸七十六戸船舶十一艘其他建物殆ント全燒シ之レヲ免レシ
モノ僅カ十分ノ一位ニ止マル原因松浦益太郎龜燒貫ケ背後ノ
薪ニ移リタルニヨル

飢饉

人皇百十八代中御門天皇ノ御宇享保五年大凶歲アリ原因不詳
人皇百十九代光格天皇ノ御宇天明三年ヨリ全八年マテ大飢饉
原因大旱ニ引續キ洪水アリタルニヨル
人皇百廿代仁孝天皇御宇天保七年丙申大飢饉原因霖雨天保四
年五月ヨリ八月ノ間晴天僅カ十二三日ナリト云フ當時米一升
三百五十文ナリ

明治元年凶荒アリ原因内亂ト天候ノ不順ニヨル米一升ノ代價
金一貫五百文ニマテ上騰シタリ
以上ノ凶荒ニハ村民ノ常食トスルモノハ草ノ根又ハ木皮ノ類
及米麥ノ糖ヲ使用スルヲ以テ是等ノ細民ハ身体膨脹シ步行ニ
サヘ苦ミ終ニハ餓死ノ慘狀ヲ呈スルモノアリタリト云フ(口碑)

地震

文政十四年十一月四日午后二時震動急

明治三年二月六日午后五時震動急

以上ハ只震動スルノミニシテ被害ナシ其他微震屢アリト雖モ
記載スル程ノコトナシ

内亂

明治元年ノ頃ヨリ隱岐國內亂ヲ惹起シ其結果佛法廢止ノ運動
トナリ終ニ明治三年八月廢寺トナレリ此役ニ於テハ百姓ト名

クル所ノ壯丁及志願者ヲ以テ壯士團體ヲ組織シ銃劍其他ノ訓
練ヲナサシメタリ其費用隱岐全國ノ住民負擔シ大ニ其排債ニ
苦ミタリ

風害

明治廿六年十月十四日暴風雨午后六時東北ノ方位ヨリ吹來リ
午後ノ五時ヨリハ一層甚ク敷翌十五日午前二時ヨリ風力稍々
衰ヘタリ當時ノ被害ハ頗木五百八十八本破船十五艘田畑ノ破
損二百町歩家屋破損七十二戸崩家二戸

明治二十七年九月十一日午前三時ヨリ東北風雨ヲ交ヘ吹キ起
リ全十時ヨリ風雨最モ強クシテ水量モ俄然四尺ヲ増シ田畑河
川道路ヲ辨セサルニ至ラシメタリ當時田畑家屋等ノ被害頗フ
ル多シ

川本長七ナルモノハ之レカ水災ニ罹リ困難ノ淵ニ沈ミタルナ

以テ 爾陛下ノ恩賜金ヲ受ケ又全國義民ノ救濟ヲ得タル程ノ
 コトニテ當時ノ慘狀甚々敷キヲ推知スルコト足ルヘシ

貯蓄

種會名類	數	量	現金及價格	人員	目的	摘	要
雜穀		石 四五九五	圓	○	全村人	凶荒豫備	天明八年ヨリ天保四年マテ四十 六ケ年ニ積タル分天保八年使用
金		○	五六〇七五	同	同	明治十五年頃ヨリノ積立	
粃		一〇五〇〇	四三〇五〇	同	同	明治二十八年積立	
稗		二七五〇〇	五七〇四〇	同	同	全上	
金		○	三九二一四七	同	教育基本	明治二十六年度ヨリ向三十ケ年 教育費ノ二十分ノ一ツ、ヲ貯蓄	

金	積金組	儲蓄會	共貯會	勤儉貯蓄	永榮會	合計
○	○	○	○	○	○	○
九六九一六	二二〇五七五	五五六六三	九四三三四	二二五三九五	一七〇〇	一、三三八九五
同	三十三名	二十二名	三十名	四百七名	十七名	公
○	納稅基本	凶荒豫備	全上	全上	公學資	共
共有財産ヨリ生スル收入	明治十六年ヨリ一人ニ付一ケ月 壹錢ツ、ノ積立明治廿八年迄	明治二十四年ヨリ全四十五年マ テ一人一ケ年金貳拾錢ツ、ノ積 立	全上一ケ年一人參拾錢宛ノ積立	明治廿五年ヨリ着手明治廿八年 舉村實行毎戸一日壹厘宛積立	明治廿八年創立向フ三百年ヲ期 シ利倍増殖ヲ圖ルコトトセリ	明治二十八年末現在

交通

往古ハ交通ノ不便ナルヲ尤モ甚シ殊ニ内地トノ交通ハ漁船ニ

仕立ヲ爲シ僅カニ物品ノ交換ヲナスアルモ信書ノ送致ニ至リ
 テハ其便絶テナカリシガ明治五年七月一日郵便局開始トナリ
 シモ創業ノ當時ニシテ諸般不完全ヲ免レス茲ヲ以テ内地トノ
 郵便航送モ幸便ニ托スルニ依リ東京本村間ノ信書往復ハ二三
 ケ月間ヲ要スル有様ニテ其他推シテ知ルヘキナリ
 明治十二年一月五日周吉 海士 知夫郡役所ハ郵便ノ願ムヘカヲサル
 ナ以テ郡役所戸長役場間毎月七回定飛脚ヲ巡回セシメ信書速
 達ノ方法トセラレタリ以郵便業務遅延ノ一班ヲ伺フニ足ル
 郵便業務ノ發達セシハ明治十九年頃ナリ當時ヨリ幸便航送ヲ
 廢止シ汽船航送或ハ定期航送ノ道開ケ以テ大ニ前日ト其趣キ
 ナ異ニセリ故ヲ以テ東京本村間通信ノ往復都合好キ協合ニハ
 八日間ヲ出テサルコトアリ尙ホ進メテ明治廿九年ヨリ郵便物
 汽船交換ノ便開ケタルヲ以テ一層ノ便利ヲ得タリ夫レガ爲メ

本日ノ松江新聞ヲ本日直ニ閱覽スルコトアルヲ見ルニ至レリ

物産

米 大麥 小麥 大豆 小豆 蕎麥 豌豆 蠶豆 粟 黍
 稗 藨 甘藷 鰯 鱈 鱈 鱈 鮑 鮑 榮螺 海鼠
 藻葉 和布 海苔 石花菜 荒布 牛 馬 等ナリ

物價

種類	年別		備考
	天保七年	弘化元年	
米	三十五貫文四	貫文十五貫文拾	明治十二年 圓七圓五拾錢 八圓八拾錢
麥	十九貫文二	貫文七貫五百文四	圓參圓參拾錢 參圓貳拾錢
大豆	十八貫文二	貫文四百文九	貫文六圓五拾錢 四圓四圓八拾錢

小豆	二十四貫五 百文	二貫八百文十貫五百文六圓拾錢六	圓五圓六拾錢
錫	不詳	四十四文百二十文七錢八厘五錢五厘拾四錢	
繭	○	○	○四拾圓

穀物繭ハ一石錫慶應二年以前ノ分ハ壹束(目方凡百)其以后ハ百匁ニ對スル價格ナリ

明治五年九月前ハ鐵錢銅錢(寬永通寶即)共ニ同價位ニシテ壹文ナリシモ明治五年九月第二百八十三號太政官布告ヲ以テ左ノ通り發令アリ

舊鐵錢ハ價位ヲ失ヒ候ヨリ德錢元一文錢拾六枚ヲ以テ新貨壹厘ニ通用可致候事
新舊貨幣ヲ對比スレハ即チ左ノ如シ

- 新貨 壹厘 壹錢 拾錢 壹圓
 - 舊貨 拾文 百文 壹貫文 拾貫文
- 會社

明治十四年四月廿日畜牛社創立明治廿二年二月七日解散
本業ハ牧畜ノ營業ヲ目的トシ西南ノ役后一時金員融通ノ爲メ物價騰貴シタル時期ニ創立シタルヲ以テ其後年々物價ノ下落ト金員不如意ナルトニ依リ社業收支相償ハサルニヨリ終ニ解散シタリ

爭論

本村ノ爭論ト題スルモノハ彼ノ大山々林ナリ(在知夫郡)享保十七年子七月廿七日美田村トノ爭論アリタレモ當時庄屋等ノ裁許ニヨリ事濟トナリタリ且ツ又其前後ニ於テモ數回ノ爭論アリタリ

抑々此大山山林ハ往古ヨリ山手錢ヲ美田村へ差出シ來リ候得共其后中絶致シタルヲ以テ古來ノ通リ差出方請願ニ付左ノ通裁許アリタリ

右隱州知夫里郡美田村山へ同郡知夫里村浦ノ郷村宇賀村海士郡海士村福井村布施村崎村此七ヶ村從古來入來薪杭木伐リ候ニ付來ル卯年ヨリ右七ヶ村中シテ銀五十五貫宛毎歲美田村ニ差出可遣旨相方納得ノ上申出候趣聞届置候然ル上ハ以來右証文ノ通少モ違亂仕間敷依テ爲後証右双方書付ニ如斯令濟書美田村へ一通七ヶ村中へ一通遣之者也

延享三年寅九月

代官 大木 長太夫

郡代 速水 與一兵衛

以上ノ如キ次第ナルモ尙ホ時々爭論起レリ然ル處明治九年地租改正ノ當時所有權全ク知夫村外六ヶ村へ夫々移轉シタ

明治十五年美田村ヨリ右大山々林取返ノ件官訴セリ茲ニ於テ七ヶ村ハ聯合同盟シ其曲直ヲ爭ヒシガ終ニ左ノ如ク和解濟口トナリタリ

約定証

今般知夫郡美田村ヨリ海士郡布施村へ係リ千三百七番字文學山林反別拾町六反六畝廿歩ノ場所所有權回復ノ儀西郷治安裁判所へ出願則勸解第五百九十九號ヲ以テ布施村へ喚起相成既ニ曲直ヲ爭フノ場合ニ立至リ候處畢竟右所有權回復ノ事タル往古ヨリ海士郡海士村福井村崎村知夫郡知夫村浦郷村宇賀村此六ヶ村ニ於テモ全様ノ場所美田村ニ有之ニ付テハ獨リ布施村ニ限ラサル勢ニシテ殆ント島前全島ノ葛藤ト相成不容易況景ニ付郡長高島士駿殿懇々御説諭ノ末知夫

郡別府村海士郡宇受賀村豊田村知々井村太井村此五ヶ村ヨ
リ和濟之儀取扱ニ付双方納得ノ上相任セ依之右七ヶ村ヨリ
金五百圓和濟取扱候五ヶ村へ貰受ケ之レテ訴訟入費トシテ
右五ヶ村ヨリ美田村へ相渡シ無滞相濟候ニ付テハ土地ハ勿
論立木其他ニ至ル迄七ヶ村トモ確乎タル所有權ヲ有シ候ニ
付美田村ニ於テ如何様ノ書類有之且向後發見候トモ所有權
ニ關スル部目ハ悉ク無功ニ屬シ一切訴訟等ハ致間敷候依之
双方及和濟村人民惣代人共調印致シ十三ヶ村へ各一通ッ、
備置申候處如件

明治拾六年六月三日 關係村人民總代用係戸長連名印
前書之通り双方和議相整候ニ付テハ向後異論致間舖依之和
濟五ヶ村人民總代トシテ調印致候也

和濟村人民總代戸長連名印

69
85

明治三十年七月二日印刷
明治三十年七月廿日發行

(非賣品)

編輯者

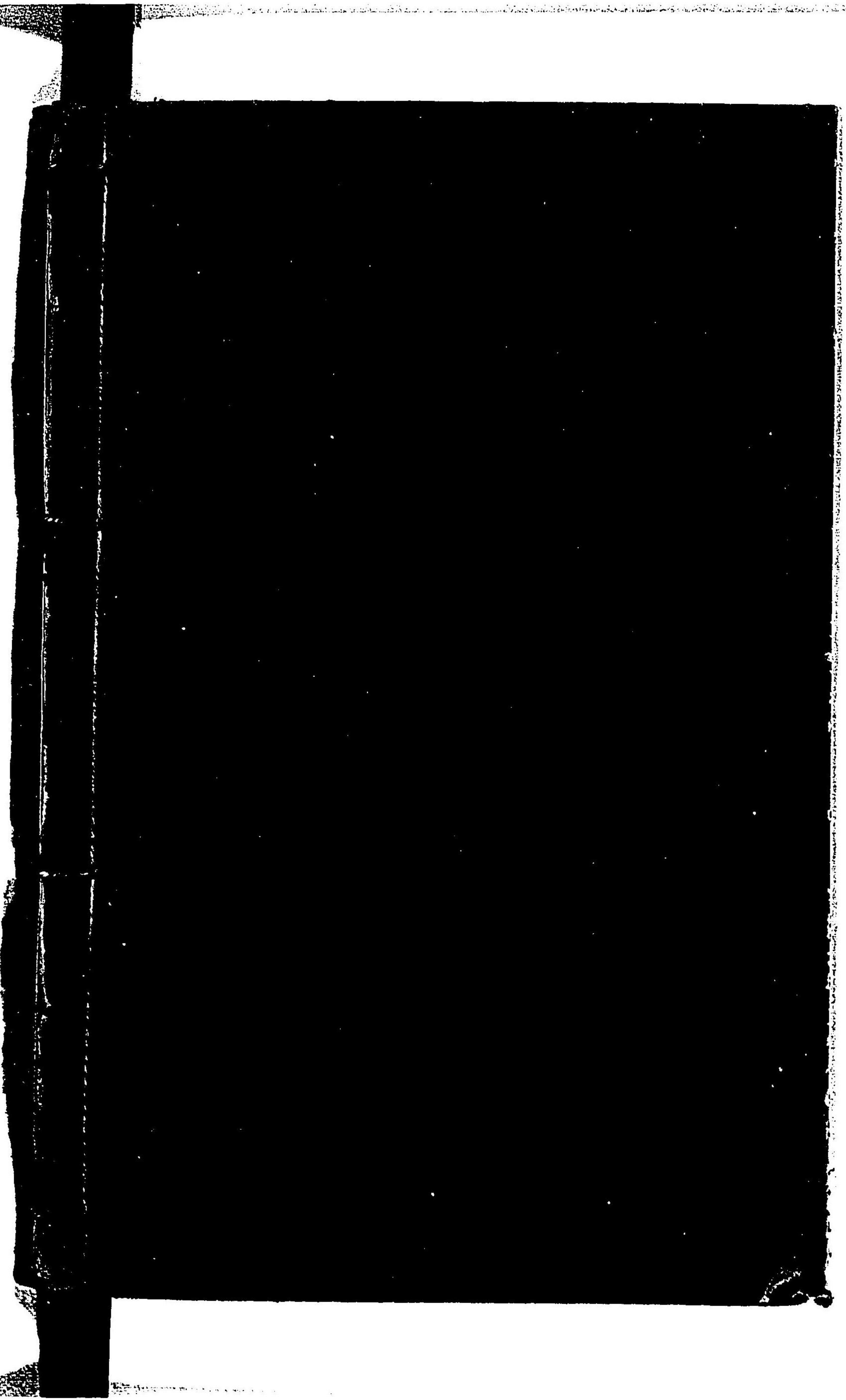
渡部周太郎

島根縣知夫郡知夫村千百五十七番地

印刷者兼

中村健太郎

島根縣周吉郡西郷中町二百十九番屋敷





025907-000-1

69-85

知夫村沿革誌

渡部 周太郎 / 編

M30

ADC-3464

